札幌大学総合論叢　第15号（2003年3月）

〈論文〉

「再定住」の物語
――ジャン・ジオノ『喜びは永遠に残る』読解の試み――

田　中　恒　寿

はじめに

『喜びは永遠に残る』は1934年に書かれたジャン・ジオノ（1895－1970）初期の傑作の一つである。フレデリック・バックのアニメーションでも有名になった『木を植えた男』（1953年）の原点とも位置づけられるこの長編は，木を植えることをはじめとする無償の行為が，ある高原のさびれた共同体に希望と幸福をもたらすさまを，濃密な自然描写とともに描き出すところに大きな特徴がある。

だが，この小説から一種のユートピアの出現を読み取るだけでは不十分であろう。小論は，この『喜びは永遠に残る』という小説を，「再定住（reinhabitation）」という観点から読みなおすことを目的とする。「再定住」という考え方を一言で要約するなら，暮らしている土地の生態系に自分が属している（有機的につながっている）ということを自らに再教育していくことを言う。木を植えることに象徴される無償の行為は，再教育の手段であり，再定住はこの意識改革を通じて人と自然が健全な共存関係を回復することを目指すものだ。

結論から言えば，『喜びは永遠に残る』は，個々人の「再定住」の試みというよりも，グレモーヌ高原の住人たちが集団で「再定住」をしていく過程を描いた作品であると言えるだろう。

小論の第1章では，「再定住」の概念を確認した後，大枠において『喜びは永遠に残る』を再定住の物語として捉え直す。第2章では，ボビのあやつる詩的言語と癒す人としての役割について考察する。第3章ではボビに触発されたグレモーヌ高原の人々がとった行動と，その効果について，野性の回復という観点から分析する。

第1章 再 定 住

この章では，まず「再定住」という考え方を確認した後に，『喜びは永遠に残る』のストーリーをこの再定住の枠組みでおおまかに捉え直しておこう。

1.「再定住」とは

文学・環境学会編『楽しく読めるネイチャーライティング』においては，環境文学に関連するいくつかのキーワードが取り上げられ解説されているが，「生命地域主義」というキーワードに関連して「再定住」は次のように定義づけられている。

> 生命地域主義は，具体的な場所を生きることを要請する。一つの場所に住み，生態系との関係において自己を再教育し，流域や植物や土壌などに関する正確な知識を獲得すると同時に生態系に対する人間の責任を確認する。このようなことを，生命地域主義者は「再定住」と呼ぶ。[1)]

ここには，国家や文明なるものによって根無し草にされた現代人が，いかに自然と向き合っていくべきかという問題意識がある。そもそもバイオリージョンを無視して存在する生物はありえないはずだ。それを唯一可能にしたのが人間だったが，そのことによって人間自身だけでなく，地球環境にも大きなひずみが生じてしまった。それなら，まず，もう一度「土地」に根差した生き方を取り戻すことから始めようというのが，「再定住」の発想である。[2)]

この「再定住」を中心的なテーマの一つとして深く掘り下げているネイチャー・ライターの代表といえば，ゲーリー・スナイダーが挙げられるだろう。彼は『野性の実践』の中で次のように提案した。

> 植物や天気が教えてくれるものを知っていれば，その土地の語る言葉がわかるし，我が家にいるようにも思えてくる。野にあるさまざまな力の総量が――きわめて漠然とした言い方ではあるが――いわゆる「地霊」となる。土地の霊を知ることは，自分がその一部であり，そして全体は部分からなり，その一つ一つが全体であるのを認識することである。まずは，自分がいる場所から始めよう。[3)]

「再定住」の第一歩は，土地の自然について精通することだ。「地霊（spirit of the place)」とは確かに漠然とした表現だが，スナイダーには「文化と自然の世界，これは現実に存在しているが，今ではほとんど影の世界となっている」という認識がある。ここで言う「文化」とは，自然の営みについての知恵や，コミュニティを継承発展していくための知恵を意味するだけではない。かつては「植物相，動物相，そして地形さえも文化の一部であった」という。ところが現代の文明社会では，国家や政治権力やエリート経済という「非現実的な世界が現実のものとしてまかりとおって」いる。したがって「再定住」とは「影の世界」を辿りなおすプロセスに他ならない。

> 我々は本来あるべき世界とは逆さまの時代に生きているのだ。国，州，郡といった恣意的な境界線を越えた地形上の特徴をたよりに，その土地の「目鼻だち」を辿ることで，文化と自然が昔持っていた仲間意識をいま暮らしている地域と精神の領域に，少しは取り戻すことができるだろう。[4)]

自覚的に「影の世界」を表の世界に引き戻すことによって，文化と自然という対立軸は消滅するだろう。本来の文化が自然なしに成立しえないのと同様，自然も文化によってさまざまな刻印を押されている。その相補的，あるいは有機的関係を取り戻すことが「再定住」のねらいだ。そのための手段として，「再定住」は「意識的に自然の諸力を復活させることに力を注」[5)]ぐ。再びスナイダーの言葉を借りるなら，「虐待され半ば忘れ去られた土地に戻ること――樹木を植え直し，コンクリートで固めた川をもとの自然の流れに戻し，舗装されたアスファルトを取り除くこと」[6)]が必要となる。

2．『喜びは永遠に残る』における再定住

そしてジオノの『喜びは永遠に残る』こそは，まさに「虐待され」[7)]たグレモーヌ高原（オート＝プロヴァンス地方に設定された架空の地名）に樹木を植え，鳥や野生の動物を呼び戻すことを通じて，そこに暮らす農民たちが死にかけたコミュニティを蘇生させる物語であると言えるだろう。

農民であるからといって「土地」に根ざしているとは限らない。グレモーヌ高原の農民たちの場合，むしろ土地に束縛されているといったほうがふさわしいだろう。そこでは土地が生産のための手段でしかなくなっている。隣人との交流もない。人々は星を見上げることもなく，花を植えることさえせずに，寂しさと不幸にうちひしがれている。

そこで人間も大地や自然と有機的に結びついた存在であることを再教育することが必要

となってくる。高原の一角に農場を構えるジュルダンも，それを心のどこかで待ち望み，みずからを「再定住」へと導いてくれる「彼＝癒す人」の登場を予感していた。

« Si vraiment je l'attends parce qu'il doit venir, se dit Jourdan, il arrivera par une nuit comme celle-là. » (416) [8)]

ジュルダンが期待した「彼」は，はたして間もなく登場する。その名をボビといった。物語はそのボビが起爆剤となって展開し始め，寂れたグレモーヌ高原に野性の自然が少しずつ回復していく。ボビが目指したのは，まさにグレモーヌ高原の「影」に押しやられていた自然＝文化を辿ることであった。ボビはジュルダンに高原のかつての植生を尋ねる。ナラは生えていなかったか。トネリコ，ブナ，ハンノキ，ポプラ，ナナカマド，シダ，ヒース，ネズはどうだったかと。ジュルダンの否定的な答えに，ボビはさらに質問を重ねる。

« Tu n'a pas trouvé le souvenir d'un arbre ? » (434)

「木の思い出」という表現にジュルダンは戸惑ったが，「古い根っこ」といいかえられて，ようやく記憶の糸をたぐり寄せる。

« C'était une ancienne mate de chêne. Profonde ! Vivante ! »
Jourdan resta avec ce dernier mot à pleine bouche.
« Vivante », dit-il encore. (434－5)

深い土の中で依然として生きていたナラの大木の切り株を，ずっと昔に掘り出したことをジュルダンは思い出し，その驚きをあらためてかみしめる。「生きていた」という言葉にとりわけ力を込めて発音し，二度も繰り返したのはなぜか。それはただ単に，切り株が地中で生命を維持していたことの不思議さに対する驚きではない。彼はナラの切り株の記憶とともに，自分自身の歴史を溯ったのだ。考古学者が地層を掘り下げて遺物の突端を発見するように，ジュルダンは，その溯った先に，野性の自然の突端——多分に「虐待された」姿でではあるが——を見出した。その先に見えるのは，ジュルダンが引っ越してくる以前のグレモーヌ高原に広がっていた森であり，「生きていた」のは，開墾されて「影」に押しやられていたグレモーヌの森の野性そのものでもあるだろう。

ボビの仕組んだ「再定住」のプログラムは，ひとえにグレモーヌの古層に息づいていた

自然の生態系を取り戻すことにある。それは「良き土地」の概念になじんだ地元の農民たちにとっては面食らうような発想だったが，それでも住民たちは，しだいに役に立たないものの豊かさを再発見し，自然界との生き生きとした交流を取り戻すことに成功する。先に見た「再定住」の定義によるところの「生態系に対する人間の責任」を果たしたことで，自然に人間同士のコミュニティも再生する，というのが『喜びは永遠に残る』における「再定住」のプロセスのあらましだ。

続いていよいよ次章以下では，『喜びは永遠に残る』の詳細な読解に移っていくが，第２章では，まずボビという謎めいた人物が「影」の世界についての再教育において果たす役割を明らかにしたい。

第２章　ボビの役割

グレモーヌ高原に再定住のきっかけをもたらすのは，ボビという謎めいた旅人の到着であり，物語もそこから始まる。この章では，一見小説の主人公めいたボビが果たす役割について，詩的言語と癒す人という二つの観点から考察する。

１．詩的言語による再教育

ボビは旅の軽業師である。しかし，小説内においてボビの経歴がつまびらかにされることはほとんどない。主要な舞台であるグレモーヌ高原にボビがふらりと現れるところから物語が始まり，突然姿を消すことで，物語も締めくくられる。

彼が謎めいた存在であるのは，定まった住居を持たないから，あるいは超人的な芸を身につけている（第Ⅱ章）から，というだけではない。むしろ彼の物言い，もしくは彼が紡ぐ言葉そのものが謎めいているからだと言える。

もっとも印象的な例は，中心的な登場人物の一人であるジュルダンとボビとの出会いの場面だろう（第Ⅰ章）。ある美しい夜に誘われてジュルダンが畑を耕していたところにボビが登場する。そして，空に輝くオリオン座を指して「オリオン座はニンジンの花に似ている」と唱えるのだ。

« Qu’est-ce que tu dis de cette nuit ?

— J’ai jamais vu la même.

— Moi non plus, dit l’homme [Bobi]. Orion ressemble à une fleur de carotte.

— Pardon ? » demanda Jourdan. (424)

シュールレアリストたちは，異質な言葉の出会いが散らす火花を追い求めたが，まさにボビの発した「オリオン—ニンジンの花」という一言は，電光のような啓示となってジュルダンの脳裏に刻まれる。「再教育」の始まりだ。

ボビは，意表を突いた言葉で日常気にも留めていなかった世界のなにげない部分を明るみに出す。この意味でまさに詩人と言っていいだろう。ボビの言葉は，つねに当たり前すぎて普段は顧みられることのない事柄を鋭く刺し貫く。

作品の全篇を通じて「裏」や「影」といった単語が頻出するのも偶然ではないだろう。[9] ボビが詩人であるのと同じ資格で，『喜びは永遠に残る』という小説自体もまた一編の散文詩であり，世界の裏や影の部分を照らし出す。ジュルダンの妻マルトの意識を自由間接文体で表したくだりは示唆的だ。

> On n'a l'impression qu'au fond les hommes ne savent pas très exactement ce qu'ils font. Ils bâtissent avec des pierres et ils ne voient pas que chacun de leurs gestes pour poser la pierre dans le moitier est accompagné d'une ombre de mortier. Et c'est la bâtisse d'ombre qui compte. (429)

マルトによれば，石で家を建てるとしても，大切なのは影の建物なのだ。重要なのは表の，目に見える——さらに別な言い方をすれば，物質として存在する——部分ではない，ともすれば見落としがちな影の部分なのだというマルトの独白は，物語を支える通奏低音として理解すべきだろう。

2．癒す人としてのボビ

ボビは癒すことを宿命づけられた人間だ。

> Ce [Bobi] n'était peut-être pas un soigneur de lépreux. Mais il y a des hommes prédestinés. Il suffisait peut-être de lui faire voir le mal pour que se réveille en lui l'appétit de soigner. (425)

ただし彼が癒すのは，ジュルダンが最初に尋ねたように，文字どおりの意味での「癩病人」[10] ではない。心の「癩病」，つまりは希望や喜びを忘れてしまったかたくなな精神をほぐしていくことが彼に課せられた使命である。

どのような手段を用いてボビはグレモーヌの住人たちの心に巣食った「癩病」をいやしていくのか。彼はまず，詩的言語による再教育を通じて，役に立たないもの（影）の大切さを改めて認識させようと試みる。この点はたった今確認したとおりだ。さらにこの価値観の転換は，「木を植える」行為を通して反復・強化される。

先にも触れたように，『喜びは永遠に残る』は一般に『木を植えた男』の原点と目されている。しかし『木を植えた男』が童話風に単純化され，無駄な要素をぎりぎりまで削ぎ落とされているのに対して，『喜びは永遠に残る』ではいわゆる「木を植える」という無償でかつ，ある種英雄的な行為が，いくつかの変奏によって重層的に繰り返される。

まずボビがジュルダンにサンザシの生け垣を植えることを提案するのを皮切りに，スイセンやツルニチニチソウといった花を植えたり，ジュルダンが貯えに取っておいた小麦を野鳥のえさに提供したり，高原の住民がみなで鹿を放し飼いにしたりと，文字どおりの「木を植える」行為だけにとどまらない。

その結果，グレモーヌ高原の影に追いやられていた自然の野性が取り戻され，生態系の多様性が回復するだけではない。個々人の金もうけの算段を超越したこれらの実践は，住民たちの心身の野性をも呼び覚まし，まさに自然と文化が仲間同士であることの喜びを実感させてくれる。こうしてグレモーヌ高原の人々は，干からびかけていたコミュニティを蘇生させ，共同で麦の刈り入れを楽しんだりできるようになる。何もかもボビの筋書き通りに運んでいったと言えるだろう。

それでは次章において，今度は耕作によって荒廃していたグレモーヌ高原の自然に野性を呼び戻す過程を詳しく見ていくことにしよう。

第３章　野性の回復

この章では具体的に，生け垣の植樹，小麦の放出，鹿の放牧という三つの行為に注目し，これらの無償の行為が心の癒しと世界の再発見へと深化していく過程をあとづけていく。

１．サンザシの生け垣

ジュルダンの農場に招かれたボビは，まず木を植えることを勧めた。農場が殺風景だとこぼすジュルダンに対して，赤い花のアーモンドを植えればいいとアドバイスしたあとで，サンザシの生け垣が必要だとボビは主張する。曰く，土地を隅から隅まで農地として利用することはない，自然だっていい仕事をする，生け垣をつくればたしかに収量は減るだろうが，動物たちの避難所にはなるし，何より鳥がやってくる，というわけだ。

« Car, l'abri de l'aubépine est sec et souple et c'est beaucoup aimé par un tas de bêtes fouineuses, je sais. Mais, justement, ça serait trop long à dire. Une chose seulement, pour te faire comprendre. Si tu comprends ça, tu comprends tout. Avec de l'aubépine il y a des oiseaux. Ah ! » (430)

サンザシなど確かに何の役にも立たない。しかしボビは，あえて耕地を削ってでも生け垣を植えろと言う。人間の仕事がまずいというわけでは決してないが，すこしぐらい自然のままに任せたっていいではないかというのが彼の考え方だ。重要なのは，そうすることによって動物や鳥が寄ってくる，つまり，生態系が豊かになるということだ。

ボビはジュルダンにさまざまな質問を投げかける。「これまでどんな木を植えたのか」「何の種をまいたのか」「ナラの木は植えなかったのか」「ヒナギクは植えなかったのか」「どんな動物を連れてきたのか」「野生の馬は連れてこなかったのか」「鹿やナイチンゲールやカワセミはどうなのか」といった具合だ。ジュルダンがこれまでに植えたり播いたりした植物，連れてきた動物は，収穫が見込めたり，卵や乳が取れたり，農作業に利用できたりという，「役に立つ」ものばかりだった。それに対してボビの思いつく動植物は，みんなこれといって役に立つわけではない。

ボビとの対話を続けるうち，ジュルダンやマルトの価値観も大きく転換してくる。「すべてが回転しはじめた」のだ。生産や所有という固定観念から逃れることで人間の心までが癒されていく。「青春とは無益なものに賭ける情熱なんだ」というボビの言葉は駄目押しだろう。

ジュルダンはさらに耕地の一部を割いてスイセンを植え付け，ツルニチニチソウの種を播いた。しかも，「サンザシはよく見ると星に似ている」などと，口振りまでがボビそっくりとなる。ボビによる再教育は確実にその一歩を踏み出した。

2．小麦を野鳥のえさに

ついでボビはのっぴきならない決断をジュルダンに迫っていく。売って金に換えようと貯えておいた小麦（その年収穫した分の三分の一）を，凍てつく寒さに震えている野鳥に与えてしまおうというのだ。ジュルダンが収穫した小麦を，ジュルダンと妻のパンのために使うのは正当だ，とボビは言う。さらに，翌年のために種を播くことも正当だ。しかし残りの小麦を売って得た金をタンスの引き出しにしまい込んだとたん，ジュルダンは自分が「癩病」だと気付くだろう。結局，ジュルダンの仕事の三分の一は無駄であり，「癩病」

の原因になっていると言うボビに説得されて，ジュルダンは小麦の蓄えを小鳥に提供する。

その結果はいかなるものであったか。依然として半信半疑のジュルダンの目の前に出現したのは，まさに野鳥のサンクチュアリとでも言うべきものであった。

先陣を切ったのはアオカワラヒワだ。となりの農場フラ・ジョゼピーヌへ向かいかけた一羽のアオカワラヒワが，突如として向きを変え，山積みにされた小麦へ急降下する。やがて空は「水滴が生まれ，ふくれ，落ちていく」ように，鳥で埋め尽くされた。ヤドリギツグミ，フウキンチョウ，ウソ，ホオジロ，ガン，スナヒバリ，マヒワ，アグリペヌ，ヒワ，ヴァンゴリヌ，ムネアカヒワ，ズグロムシクイ，ベニヒワ，ハタホオジロ，ルリノジコ，オオヨシキリ，キジバト，フラミンゴ，コウライウグイス，コウテンシ，キクイタダキ，カケス，ブッポウソウ，ヤマウズラ，ウズラ，ヨーロッパカヤクグリ，シジュウカラ。

ジュルダンはとうとう，家の窓からのぞいて見るだけでは我慢できなくなり，小麦をついばむ鳥たちのほうへと，ゆっくりゆっくり近づいていく。その動きがあまりに緩慢なので，「人間の動きには見えなかった」ほどだ。ついに彼は「一本の木」になりすます。

> Il avait pris sa place dans l'air comme un arbre. (469)

不安定な姿勢を空中に保ったまま，じりじりと鳥たちの群れへと間合いを詰めると，鳥たちは一瞬緊張するが，すぐさま警戒を解いて，ジュルダンの靴にとまったり，ズボンをたたいたりするものさえ現れた。

「一本の木」という比喩は，なにげないようでいて，実はそこに深い意味がこめられているようにもみえる。[11] というのは，この鳥のエピソードの中で，突如一人称の語り手が登場する——物語は基本的に三人称で書かれている——場面があり，そこで，「人間は木の葉叢のようなもの」であり，「人間が歌うためにはその葉叢のなかに風が吹き込んでくることが必要なのだ」という考え方が披瀝されているからだ。

> L'homme, on a dit qu'il était fait de cellules et de sang. Mais en réalité, il est comme un feuillage. Non pas serré en bloc mais composé d'images éparses comme les feuilles dans les branchages des arbres et au travers desquelles il faut que le vent passe pour que ça chante. Comment voulez-vous que le monde s'en serve s'il est comme une pierre ? (465)

「もし人間が石のような存在ならば，世界は人間を役だたせることができない」ということからも，このくだりは，人間と世界あるいは自然との関係のあり方について示唆したも

のと理解すべきだろう。石は自己完結（「塊になって詰まっている」）した存在であり，世界と対峙する。このようなあり方は一種の二元論であり，ジオノ自身，デカルト主義を意識的に遠ざけていたという。[12] 一方，木であれば葉は「散在」し，風が吹き込んだり陽が差し込んだりできる。つねにあらたに成長し，変貌を遂げる。人間は一本の木のように，自然界と相互に浸透し合いながら，明日に向かって変化していくべきものだというメッセージを，この一人称の語りから汲み取ることにしよう。そうすれば，物語の登場人物が，とりわけボビに触発されて，自然の諸要素に対して敏感に反応するようになることの意味が理解できる。石のように無機的に閉じこもるのではなく，木のように外界へ向かって自己を開いていくことの大切さを，この小説は一貫してうったえようとしているのだ。

ともあれ，ジュルダンは一本の木になることで，鳥たちと「歌う」ことができた。有用—無用の二分法から開放されて，彼は野鳥とあらたな関係を学んだのである。

余剰小麦を鳥のために放出することは，妻のマルトの心身にも重大な変化をもたらした。

> Elle était comme de nouveau pleine, mais cette fois elle avait deux joies mélangées : d'abord la joie béate du corps fécondé et puis une joie allègre et sauvage. (467)

彼女は「新たに妊娠したような気持ち」を味わうが，それも二種類の入り混じった喜びと形容される。つまり，「受胎した体の平穏な喜び」と，「快活で野生的な喜び」だ。「体の平穏な喜び」とは母性本能に由来するものだろうが，「野生的な喜び」の方はヒトとしての本能の覚醒であろう。事実，麦に群がる鳥たちを眺めているうちに，徐々にマルトは自然界に対して感覚を開放していく。

野生の感覚を取り戻すことによって，マルトはそれまで「影」として隠されていた世界をも認識することができるようになった。

> Que de secrets dans le monde ! (468)

自らの野性に目覚め，この世界に隠されているたくさんの秘密を再発見することは，再定住に不可欠なステップである。

3．鹿の放し飼い

「種まき」は着々と進んでいく。ボビはいよいよ最後の仕上げに向けての布石を配しはじめた。

まず彼が手をつけたのは，「自分たちの心に植え付けるための大きな種を買いに行く」ことだ。その大きな種とは，じつは雄鹿であるのだが，それと知らされないジュルダン夫婦が夜の森へボビを迎えに行く場面は圧巻である。

ボビが現れるのを待つまでの間，ジュルダンは，「俺には何もわかっていない」と嘆き悲しんでいた。動植物も，天体や大地も，すべてのものは敏感に理解しているのに，「自分たちだけが何も受け入れることができず感じることができない」と疎外感に苛まれているのだ。だがほどなく，「森に満ち溢れる魔法の喜びを」感じはじめる。二人はすでに「カエデが新たな芽を吹くたびに，小さな稲妻が輝いて飛び出し，砂糖の匂いが流れ出る」のを感知できるぐらい，自然に対する感度が鋭敏になっていた。

Partout les bourgeons s'ouvraient ; tous les arbres allumaient peu à peu des feuilles neuves. Cétait comme la lueur de plusieurs lunes. Une lueur blanche pour les feuilles d'aulnes, les pétales d'érables, les feuilles de fayards, la mousse des peupliers ; une lueur mordorée pour les bouleaux dont le petit feuillage reflétait les trons et se reflétait dans l'écorce ; une lueur de cuivre pour les saules ; une lueur rose pour les alisiers et un immense éclairage vert qui dominait tout, la lueur des feuillages sombres, les pins, les sapins et les cèdres.

Les odeurs coulaient toutes fraîches. Ça sentait le sucre, la prairie, la résine, la montagne, l'eau, la sève, le sirop de bouleau, la confiture de myrtilles, la gelée de framboise où l'on a laissé des feuilles, l'infusion de tilleul, la menuiserie neuve, la poix de cordonnier, le drap neuf. Il y avait des odeurs qui marchaient et elles étaient si fortes que les feuilles se pliaient sur leur passage. Et ainsi elles laissaient derriére elles de longs sillages d'ombres. Toutes les salles de la forêt, tous les couloirs, les piliers et les voûtes, silencieusement éclairés, attendaient. (487)

森のさまざまな木々の新芽が，あるものは白く，またあるものは金褐色に，銅色に，ばら色にと輝きを放つのを見分ける。さらには樹液，やに，ジャム，ゼリー，煎じ茶，木工品，タールといった多様な匂いを嗅ぎ分ける。自分たちが暮らす土地の自然に関する再教育という点で，ジュルダン夫婦はもはや免許皆伝の域に達しているといえるのかもしれない。

やがて闇の中にボビのシルエットが浮かび上がる。そして，彼が連れてきた雄鹿もまた，木の比喩で正体が明かされる。

C'était une bête moitié bête et moitié arbre. (488)

ボビはいましがたジュルダンとマルトが目の当たりにした木々の新芽と同じように，純粋で野生の鹿の目が闇を照らす力について注意を促した。人間の瞼の下は死んだ石しかないので，季節ごとの喜びや素朴なやさしさを味わうことができなくなってしまっているというのである。

« Et, voyez, tous les deux [Jourdan et Marthe], comme ce qui est pur et sauvage éclaire l'ombre. Voyez qu'il a les yeux de la même couleur que les bourgeons, et voyez comme notre regard à nous ne sertplus à rien quand nous sommes en pleine ombre mêlés aux choses sauvages, comme nous n'avons plus que des pierres mortes sous les paupières parce que nous avons perdu la joie des saisons et la gentillesse naïve. Regardez comme il a les yeux luisants ! » (489)

ここでもまた，木と石のイメージが対照的に用いられていることを指摘しておきたい。しかも，「純粋で野生的なものがいかに闇を照らすか」というくだりは，単にボビが連れてきた鹿の特性にとどまらない。純粋で野生的なものを失ってしまった人間がいかにして闇を照らし出す生きた目を取り戻すかという，この小説全体のテーマをも見事に代弁しているといえるだろう。

ボビは，「これですべての種を播いたことになる」と言った。この雄鹿の種が開花するのは第X章の雌鹿狩りのシーンにおいてである。その夜はまさに「人間たちと自然の生命との間に調和がかもしだされていた。」満月に照らされた森に動物たちがうごめき，トビムシがいたるところで鳴く。森がその高みから「奇妙によく響く沈んだ長い言葉」を投げかけるかと思えば，「花崗岩の大きな岩盤が唸り」をあげる。木の根っこのアニスのような匂い，月光にきらめく金蝿，樹液をいっぱいに吸い上げてみずからの葉を広げる草，木の葉のあいだを流れる冷気の音，石の香り。バロック的とも言える自然のプレリュードだ。そして，ラッパの合図とともに狩りが始まる。グレモーヌの男たちに追いたてられて，鹿のみならず，マーモット，キツネ，リス，カワウソ，ハリネズミ，ケナガイタチ，コエゾイタチといった小動物たちも逃げ惑う。お祭り騒ぎのような共同作業によって首尾よく捕獲された雌鹿三頭はグレモーヌ高原へ連れ帰られ，ボビがすでに放していた雄鹿とともに放し飼いにされた。

共同体のメンバーによる祝祭的なエネルギーの発散は，今回が初めてではない。ボビの

雄鹿は，それぞれの不幸や悲しみを背負い，互いに孤立して暮らしていたグレモーヌ高原の農民たちを一つにまとめる大きな力を持っていたのだ。文字通りの放し飼い——柵も何もない——にされた雄鹿を，そして農場ラ・ジュルダーヌに生じているらしい新しい変化を，みずからの目で確かめようと集まってきた人々は，自然に協力し合いながら野外パーティーを成功裏に実行していた（第Ⅶ章）。

重要なのは，さまざまな「木を植える」行為が生産や所有の放棄に立脚しているということであり，さらに別の観点からとらえるなら，それが生態系の多様化に一役買っているということだ。生産や所有の観念にとらわれることは不幸の——小説中の言葉を用いるなら「癩病」の——原因であり，この固定観念からの開放は，人間に希望や喜びをもたらすだけでなく，田園の自然をもより多様で生き生きとしたものに変容させる力を持つ。この点において，『喜びは永遠に残る』をエコロジカルに解釈する余地を見出せるだろう。現に，余剰小麦を放棄することによって実現された鳥のサンクチュアリが，この土地の鳥相を網羅的に再現したかのような賑わいをみせていたことは，すでに確認したとおりだ。

さらに，この小説の自然描写において特徴的なのは，動物や植物，はては風や雲や川までもが意識を持ち，言葉をしゃべり，擬人的にふるまう点だ。第XXⅡ章の前半などは，まさに人間の共同体と平行して，動物たちの共同体が濃密に息づいていることを端的に示している。[13)]

人間と同等の資格でその意識やふるまいを描き出されることによって，グレモーヌの自然は，動物や森や風さえも，物語のたんなる背景や小道具にとどまることを止める。高原の共同体——ヒトのコロニー——がボビの言葉に触発され，固定観念の殻を打ち破る努力を続けることによって，土地の生態系が豊かになると同時に，生き物たちも農民たち同様「喜び」を感じて高揚しはじめるのだ。そのことを象徴的に表したのがこの擬人化表現であると言えないだろうか。さらに，擬人的に表現することによって，動物たちは，人間と切り離されたよそよそしい存在ではなくなる。グレモーヌ高原の人々がお互いに心を開き，さらには自然に対しても心を開いた結果，人間と自然との距離が縮まった。この意味でも，擬人化表現は象徴的である。

おわりに

「再定住」の物語は順調に，そして粛々と進んでいく。『喜びは永遠に残る』はこれといって悪人の登場しない予定調和的な世界だ。だが，最後の最後でボビはグレモーヌ高原を見捨て，雷に打たれて死ぬ。「癒す人」として見事にグレモーヌ高原の「癩病」を治し

たボビも，自分の内なる深淵を埋めることはできなかった。つねによそ者，異分子として狂言回しの役を演じ続けたボビだったが，この悲しい結末は「喜び」の永続性に疑問を投げかけるものなのだろうか。いや，むしろ「再定住」の文脈からすれば，根ざす土地を持たないボビが最終的な幸福を手にできないのも当然なのかもしれない。ボビはあくまでグレモーヌ高原の農民たちが「再定住」する手助けをしただけなのだ。その意味で，この物語の主人公はむしろジュルダン夫婦をはじめとするグレモーヌ高原の住人全体であって，ボビは脇役にすぎないという解釈も可能であろう。ボビの死の直後に添えられた短い最終章では，高原の人々が，ボビの再来を信じて，何事もなかったかのように，常と変わらぬ生活を繰り広げている。すでに死んだとも知らずに再び帰ってくることを願い続ける。つまりは永遠の不在を心の糧とするということだ。「影の建物」の倍音がここにも鳴り響いている。

こうして「再定住」の過程は完結した。再度確認すると，「よそ者」として生きる宿命を負ったボビは，グレモーヌ高原において，住民たちの心に巣くった「癩病」を癒していく。その手段とは，第一には詩的言語によって世界の「影」の部分を再発見するよう人々の考えをみちびいていくことであり，第二には「木を植える」という実際の行為を通じて，役に立たない自然を再評価し，生物多様性を増すことである。結果として，高原には木や花や鳥や動物をはじめとする自然が輝きを取り戻し，同時に人間の共同体も再生する。

グレモーヌ高原にボビがもたらしたもの，それは役に立たないものあるいは「影」――つまるところは自然――の再発見であり，共同体の再生であった。土地の自然に目を開き，それを豊かにするため手間を惜しまないことで，人々は心の「癩病」を癒し，喜びや希望を手に入れる。グレモーヌ高原における再定住は，確かに一つのユートピアを出現させたと言えるだろう。ただしエコロジカルな面を強調すれば，ユートピア再建の鍵はあくまで生命地域についての再教育だ，というメッセージをこの物語から読み取ることが可能になる。

最後になるが，擬人法をはじめとする自然描写に関してはもう少し精密な分析をする必要があるだろう。それほどまでにこの小説では，動植物や自然現象が，いわゆる装飾的な背景であることにとどまらず，物語のプロットに密接に絡み合ってきているが，小論においては深く追求できなかった。この点については稿を改めて論じることとしたい。

注

1）文学・環境学会編『たのしく読めるネイチャー・ライティング』p. 247。

2）ただし，この場合の「土地」とは都市の外部に広がる人間の居住域，すなわち比較的自然度の高い

農地や森林や河川や海，あるいは砂漠を意味するだけではない。生命地域に属していることを自覚しながら生きることは都市そのものの内部においても十分に可能であろう。さらに「土地」を自分の家や所有地に限定するか，生命地域の広がり——生命地域にもさまざまな階層があり，最大のものは宇宙であろう——に合わせて拡大するかで存在の様態も大きく変わりうる。例えば後述するゲーリー・スナイダーも，ホームレスを論じた部分で，「ここでの『ホームレス』は『全宇宙の中で悠然として』という意味になっている。同様に，自分の住む場所にそなわる全体性の感覚を守って生活する自立的な人々の目には，自分の家庭も，地域の山や林も，同じ次元のものと映る」（*Practice of the Wild*, p. 104）と述べている。

3）*Practice of the Wild*, p. 38.

4）*op. cit.*, p. 37.

5）山里勝己「ゲーリー・スナイダーと再定住——人間中心主義を越えて」p. 322。

6）*op. cit.*, p. 178.

7）「虐待」という言葉には多少の注釈が必要かもしれない。文化と自然，都市と農村という一般的な二項対立に拠れば，少なくとも相対的には，農村は自然の側にあり，「土地」に根づくための条件には恵まれているはずである。だが，ここであらためてスナイダーが指摘した「良き土地」「野性の土地」という区分を思い起こそう。この場合の「良い」とは耕作に適したという意味で，野性とは反対の概念である。生産力を高めるために耕作することは，自然の遷移を抑圧することに他ならない。（*Practice of the Wild*, pp. 79, 91.）『喜びは永遠に残る』においても，耕作することへの執着を断ち切ることが，コミュニティ再生の第一歩となる。（後述の「サンザシの生け垣」を参照のこと。）

8）*Que ma joie demeure* 本文からの引用において，その最後にカッコで示した数字は，Jean Giono, *Œuvres romanesques complètes*, tome 2, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1972 のページを指すものとする。以下も同様。

9）スナイダーもまた「影」という言葉を用いていた。興味深い一致である。

10）物語の設定された時代や地域から判断して，あえてハンセン病ではなく癩病という言葉を選んだ翻訳者の見解（『喜びは永遠に残る』「訳者あとがき」p. 538）を支持し，小論においてもそれを踏襲する。

11）ボビが最初にジュルダンの畑に現れたときも，「木のような背丈」と形容されていた。

12）Pierre CITRON, *Jean Giono*, p. 48.

13）『喜びは永遠に残る』の「訳者あとがき」の中で山本省はこう述べている。「あふれるほどの自然の生命，これは夏に野外へ出てみれば観察できることであるが，そうした自然を『世界の歌』として作品の中に取り込むことができたということが，この作品の豊かさだと言い切っていいのではないかと訳者は考えている。」（p. 545）

参考文献

＊ジオノのテクストとしては次のものを使用した。

Jean Giono, *Œuvres romanesques complètes*, tome Ⅱ, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1972.

＊また，日本語に訳出する際には次の翻訳書を参考にしたが，一部筆者の責任で修正したところもある。

ジャン・ジオノ『喜びは永遠に残る』（山本省訳）河出書房新社 2001 年

文学・環境学会編『たのしく読めるネイチャー・ライティング』ミネルヴァ書房 2000 年

山里勝己「ゲーリー・スナイダーと再定住——人間中心主義を越えて」（スコット・スロヴィック／野田研一編著『アメリカ文学の「自然」を読む』ミネルヴァ書房 1996 年）pp. 321－338

Actes du IVe colloque international Jean Giono, colloque du centenaire, *Giono romancier*, Aix-en-Provence, Publications de l'Université de Provence, 1999.

Pierre CITRON, *Jean Giono*, Seuil, 1995.

Jean-Yves LAURICHESSE, *Giono et Stendhal, chemins de lecture et de création*, Aix-en-Provence, Publications de l'Université de Provence, 1994.

Gary SNYDER, *Practice of the Wild*, San Francisco, North Point Press, 1990.

Sylvie VIGNES, *Giono et le travail des sensations : un barrage contre le vide* , Nizet, 1998.